

第 17 回 北海道アダプテッド・スポーツ研究会報告

主 催：北海道アダプテッド・スポーツ研究会

後 援：札幌市障がい者スポーツ指導者協議会、北海道障がい者スポーツ協会、
札幌市教育委員会、札幌市、札幌市障がい者スポーツ協会
北海道教育大学特別支援教育プロジェクト

日 時：2017 年 11 月 11 日（土）10:00～17:00

会 場：札幌みなみの杜高等支援学校



会場外観（休憩時間には校内の見学もさせていただきました）

今回は、札幌市に新設された札幌みなみの杜高等支援学校にて開催しました。学校では働く力を育てていく設備として、カフェをはじめ、様々な機器を備えています。新しい学校はとてもきれいでした。また、体育館の解放は障害者スポーツ専用という特徴があり、札幌市のスポーツの拠点として活性化を進めています。

あいにくの雨模様でしたが、当日は 50 名を越える参加者にお越しいただきました。



受付の様子



会場の様子

基調報告 「札幌市障がい者スポーツ指導者協議会の取り組みについて」

佐藤浩史（一般社団法人札幌市障がい者スポーツ指導者協議会 常務理事 事務局長

・大正大学専任講師）

開会から引き続いて佐藤さんより基調報告をいただきました。札幌市障がい者スポーツ指導者協議会の取組について、協議会の沿革や障がい者スポーツ指導員のこと、具体的な活動内容の紹介などからお話いただきました。冒頭、組織の定義のお話では改めて団体を作る意義について考えさせられました。また、障がい者スポーツのイベント企画や大会等へのボランティア活動などの事例を通して、障がい者スポーツの発展に向けた課題など様々な視点からの報告がありました。オリパラも含めた社会動向も理解しつつ、情報共有や情報発信を進めて、障がい者スポーツの発展につなげていければと感じました。



佐藤氏

研究/実践報告

「北海道における『障害者フライングディスク競技と競技大会』の工夫」

牧野誠一（北海道障害者フライングディスク連盟）

米津之正（工房ウッディートイズ）

北海道における障がい者フライングディスク大会について、重い障害があったとしてもスポーツに参加し、楽しめることの重要性についてお話いただきました。美術教育（活動）における「よろこび」の視点からみた、スポーツにおけるよろこび視点のお話は、なるほどと思うところがありました。また、北海道で行われている競技大会の特徴や参加者の傾向などもわかりやすくお話いただきました。さらに、参加者の傾向から楽しみ方について検討し、多様性に合わせた用具の工夫のあり方やその開発についても興味深いものでした。（開発されたディスク発射器はワークショップでも体験出来ました）



牧野氏

城田氏

「リオデジャネイロパラリンピックから始まったパラカヌー」

城田幸俊（北海道パラカヌー協会）

パラカヌーの現状と課題について、コーチの視点から貴重なお話をいただきました。競技の普及も含め、選手層を厚くしていくことが難しい現状があり、世界トップとの差も大きいことがわかりました。日本一早い選手でも、パラリンピックの国内選考基準に届いていない状況とのことです。また、栄養やバイオメカニクス等、様々な面でサポートが必要ですが、メダルの可能性によってサポートの差がつき、メダルが取れないとみられるとすぐに助成がなくなる現状も衝撃でした。

「日本車いすフェンシング協会 北海道支部 活動報告」

齋藤肇（日本車いすフェンシング協会北海道支部）

北海道が行っているパラアスリート発掘事業の様子や国際親善大会（IWAS：国際車いす・四肢切断者スポーツ連盟）の様子を中心に北海道における車いすフェンシングの動向について報告いただきました。

IWASの大会で北海道から参加の鈴木努選手がカテゴリーAのエペにて第3位となった報告もいただきました。北海道の選手発掘事業で講習を受けた選手でもあります。

また、2020年を過ぎた後のスポーツに関する予算についても懸念のお話をいただきました。オリパラが終わった後は補助が打ち切られるのではないかと懸念があるとのことで、継続してスポーツができるよう支援のあり方についても問題提起いただきました。



齋藤氏

井上（誠）氏

「北海道の精神障害者スポーツの現状と今後」

井上誠士郎（特定医療法人朋友会 石金病院）

北海道の精神障害者のスポーツの現状について報告をいただきました。精神障害者のスポーツが遅れている理由について、歴史的な政策の背景の関連や、脱施設と地域生活の考え方といった、これまでの動向や障害の置かれている状況を含めてわかりやすい報告をいただきました。また、精神障がい者のスポーツを支援している、サポーターズクラブで行われている活動についてもお話しいただきました。競技だけではなく、活動を通じて障がいの有無関係なく一緒に取り組んでいくことの重要性もお話しいただきました。

「リハビリテーションにおけるスポーツの取り組み」

井上和広（北海道立子ども総合医療・療育センター）

小児リハビリにおけるスポーツの効果等について実践を交えて報告していただきました。身体機能だけではない様々な効果が期待されるスポーツであり、ICF（国際生活機能分類モデル）の観点からは、社会参加等にもつながる視点を意識することが重要であるといったお話をいただきました。スポーツが一つのきっかけとして、人生の質を高めていく、そんなことを改めて感じさせていただく事例のお話もありました。小児期から取り組むスポーツの意義を感じることができました。



井上（和）氏

辻本氏

「総合型地域スポーツクラブ Sports Life Design Iwamizawa の活動

～障がい者とバルシューレについて～」

辻本智也（Sports Life Design Iwamizawa）

総合型地域スポーツクラブの活動で行われているバルシューレについて報告いただきました。バルシューレ（ボールを使った運動）の考え方やその有効性、実践内容についてお話がありました。無指導学習として、楽しい中でいつの間にか学んでいる環境等を作るという考え方は興味深いものでした。障がいがある人たちや子どもに、視覚情報や簡単なルールで提供することでいつの間にか全身を使った運動が行われているといったことが一つのポイントということがわかりました。様々な施設等においても有用なプログラムとして期待できる一方で、専門指導者を増やしていくことも課題としてお話いただきました。

シンポジウム

「障害者にとってスポーツを身近なものにする経験とは何か？」

シンポジスト ・荻野ひとみ（健康運動指導士/北海道教育大学旭川校非常勤講師）
 ・曳田和樹（岩見沢高等養護学校教諭/車椅子ソフトボール）
 ・碓井琴音（北海道教育大学札幌校学生/車椅子バスケットボール）

コーディネーター・安井友康（北海道教育大学札幌校）

障害がある人のスポーツについてメディアやイベント等で取り上げられる機会が増え、様々な人に知ってもらう機会となっていますが、障害当事者がそれに触れて「すごい」と感じる一方で、「日常的にスポーツとして参加したい。やってみたい。」といったきっかけに十分なっているのだろうか、という問いかけからのシンポジウムでした。地域で行える身近なものとして、スポーツを継続していくためにはどのようなことが求められているのか、それぞれの立場からざっくばらんにお話いただきました。

荻野さんからは、「パラリンピックはすごいけど、重い知的障害の人には別世界では？」との投げかけからスタートしました。重い知的障害の人たちの運動機会の一例としては、生活介護などの福祉サービスの中で行われている現状とのことでした。また、健常者が昨今障害者のスポーツに興味を示している中で、インクルーシブなイベントとしてのスポーツも重要ではないかとのお話がありました。障害者に特化するのではなく、誰もが参加できる視点の大切さや、身近なところで参加できるといった情報を発信することで、スポーツが身近になるのではないかといったお話もいただきました。さらに、どんな人でも続けられる環境を作ることが重要であり、身体活動からスポーツへつながる機会や「みる」ことを増やせるような活動なども必要ではないかとのことでした。そのためには、今ある活動に助成が行くようなシステムを作っていくことも必要ではないかとのお話もいただきました。

曳田さんからは、学校の視点からのお話をいただきました。高校に来て初めて障害者スポーツに触れる子どもも多いということです。そのため、チーム練習より基礎的なトレーニングが必要な場合も多くなり、競技として取り組む時間も少ないそうです。さらに学校や寮生活における限られた時間や、人員の不足、部員の運動差なども、関連する課題として挙げられました。また、スポーツ体験会などのイベントも増えてきましたが、そこで知ったからといって、スポーツができることとはイコールにならないため、競技がうまくなりたい人が、なるための環境設定の重要性をあげていました。選手の原石となりえる子どもたちが、十分に競技に取り組んでいけるような予算のあり方や、学校と学外資源との結び付けの必要性などもお話をいただきました。

碓井さんからは、選手としての立場からお話をいただきました。北海道において、女子バスケの選手の少なさ、女子チームがないこと、それに伴って本州のチームに混ざらなければならず、費用面の課題があげられていました。近年、スポーツに関する情報が増えている一方で、競技の選択肢が増えたことも、選手が集まりにくい要因として挙げられていました。また、障害者スポーツにおいて、激しさに注目が集まることが多いが、果たしてそれが本当に参加（プレー）してみたいといった魅力につながっているのか、といったお話もいただきました。もっとテクニカルな部分での面白さなどを知ってもらいたいとのことでした。広く一般に周知はされているものの別世界になってしまい、選手の発掘になりにくいのではないかということでした。

それぞれの報告の後、安井コーディネーターのもと、活発な意見交換が行われ、スポーツを身近なものにしていくためにはまだまだやるべきことが多いと感じました。



荻野氏



曳田氏



碓井氏



全体の様子

ワークショップ（体育館）

今年も恒例の体験ワークショップを行いました。発表にもあったフライングディスク発射器の体験や、カヌーの取扱いに関する説明など興味深く聞いていました。シッティングバレーや車いす卓球などの用具も備えてあり、意外と体験する機会の少ない器具にも触れながら、それぞれに楽しんでいました。



ディスク発射器



車いす卓球



シッティングバレー



車いすバスケットボール



カヌー



パラシュート

懇親会

本会終了後、会場近隣の居酒屋さんにて懇親会を行いました。多くの皆様にご参加いただき、より深い情報交換に花を咲かせました。研究会では、お店で懇親会をすることは珍しいのでちょっと新鮮でした。

今回も、会場とさせていただいた札幌みなみの杜高等支援学校、札幌市障がい者スポーツ指導者協議会をはじめ、多くのご協力をいただきとても充実した内容で実施することができました。また、たくさんの方にもご参加いただき、心より感謝申し上げます。

※次回の研究会は、2018 年 12 月頃に開催を予定したいと考えております。皆様、ご予約を空けておいていただき、ふるってご参加いただければと思います。

パラスポーツが様々なメディアでも取り上げられ、知る機会が増えている昨今ですが、障害の有無関係なく、スポーツを身近なものとして継続していける環境を作っていく必要があります。今後とも情報交流を通しながら一つずつ、力を合わせて進めていければ幸いです。

今後ともたくさんの情報交流を進められる研究会として継続していければと思いますので、今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

(報告：近藤尚也)